

i 3度目訪日で初講演 「日台は生命共同体」 中国軟化 背景に日本の環境技術

FujiSankei Business i. 2007/6/2

「中国が変わったんだよ」。5月30日に曾文恵夫人など家族とともに来日した台湾前総統の李登輝氏(84)は、これまで中国の政治的反発から封じられてきた東京訪問や講演、記者会見など訪日時の公の場での活動を今回は次々と実現した背景をこう明かした。

関係強化を期待

2004年末から05年初めにかけての
前回の名古屋、京都、金沢などへの訪問
から約2年半。



第1回「後藤新平賞」を受賞した台湾前総統の李登輝氏(1日、東京都港区の国際文化会館)

一部の記者と会った李氏は1日、「(2年半の間に)中国にとって日本はなくてはならない国になった」と話し、中国が李氏訪日への批判をトーンダウンさせたのは、ノドから手が出るほどほしい環境技術などを提供する日本の存在感が、中国の中で急速に大きくなったとの見方を示した。

さらに、05年の法改正で日本が台湾人旅客の入国にビザ(査証)取得を免除するなど、日本政府の対台姿勢にも変化がみられた。中国の王毅駐日大使が3年前「李登輝はトラブルメーカーではなく戦争メーカー」とまで酷評して阻止しようとした李氏訪日にも、ビザの申請が不要になった。

後藤新平賞受賞後、東京都港区の国際文化会館で同日行われた初の記者会見で李氏は、「日本と台湾は生命共同体。台湾にいったん何かあればすぐ日本にも響く。台湾海峡問題は日本にとっても大きな問題のひとつ」とした。その上で「日台に外交関係はなく、赤の他人みたいな形になっている。いざとなったら(有事発生など)何もできない」と強調。関係強化で日本に理解を求めた。

いでよリーダー

李氏は同日の講演の中で、後藤新平の台湾における業績として(1)治安の回復(2)公共衛生観念の向上(3)教育の普及(4)鉄道や港湾の建設(5)台湾銀行の創設など金融制度(6)農林水産業の振興 - など12項目に分けて評価。その上で、「その後の台湾の経営開発はすべて後藤新平の敷いたレールの上を走った」とまで述べた。

李氏は、「後藤新平の基礎の上に新しい台湾政府と台湾の民主化を促進した私は、決して無縁の者ではなかった」と述懐した。蒋介石が率いた中国国民党の内部から台湾民主化に向け、理想を一步一步、実践を通して現実のものにしてきた李氏だが、自らの政治家としての足跡に、後藤新平を重ね合わせたようだ。

8年8カ月の台湾総督府民政長官時代に行った数多くの政策立案のみならず、実際に成果が上がるよう自ら実践した後藤新平の足跡に、「一人の人間と

して立派だ」と述べて、「私にとって偉大な精神的な導きの先生である」と結論づけた。

後藤新平のもつ人間像は、その後の日本の政治家に見られなかったという李氏だが、「これからの日本は人的なリーダーシップを創造していかなければならない。がんばってください」と記者会見を締めくくった。李氏は今回の訪日を通じ、今も日本に抱き続ける強い期待感を多くの日本人に伝えようとしている。(河崎真澄)